新たな出発「がんばって」

長く務めた職を退職して新しい仕事に就いたときのことを思い出した。もう八年も前のことになる。

新しい職場までは家から一時間半の電車通勤で、週四日の勤務となった。自宅の最寄り駅から乗って二回乗り換えをして職場の近くの駅に着き、ここから十五分ほど歩く。新しい慣れない職場ということで、やや不安な気持ちであった。

その日は電車が遅れて、いつもよりも少し遅い時間に駅で降りて職場に向かって歩いていると、同じ方向に歩いて行く数人の若者たちと一緒になった。

知的障害のある成人の方たちが働く小規模の通所施設があると聞いていた。そこに通っている人たちなのだろうということが、若者たちの様子から推測できた。歩いている人たちの中に、大柄の青年がいて私のすぐ前を歩いていた。その彼は、大きな体に似合わず不安そうに何回も後ろを振り返っているのだった。

何回か振り向いたときに、後ろから「がんばって」と女性の優しい声がした。振り向いてみると、十メートルほど後ろに、青年の母親であろうと思われる女性がいて、私と目が合うと恥ずかしそうな様子を見せた。

その声を聞いた青年は安心したようにスピードをあげて、通所施設のある方向に向かって歩いていった。女性はそこで見送ると、駅の方向へもどっていった。

この三月に学校を卒業した青年は、一人で通うための練習をしているのだろう。電車に乗って最寄り駅で降り歩いていく彼を、今は少し離れて母親が見守っているのだろう。間違えずに電車に乗り、混雑した駅で降り、そこから歩いて通うということは、彼にとっては容易なことではないに違いない。いまは、不安とのたたかいの日々なのかもしれない。きっと彼は、少し時間はかかるかもしれないが、一人で通うことができるようになるに違いない。

職場に向かって歩きながら振り向いてみると、さっきの青年や母親らしき女性の姿はもう見えなかった。そのとき、もう一度「がんばって」というあの優しい声が聞こえたような気がした。

私は新しい職場に向かって少しスピードを上げて歩くことにした。